

<報告>

## アントワーヌ・ベルマン

### 『翻訳の時代：ベンヤミン「翻訳者の使命」註解』を読む

岸 正樹

#### 1. アントワーヌ・ベルマンと「翻訳学」の意義

##### 1.1 アントワーヌ・ベルマン

まずアントワーヌ・ベルマン(1942-1991)について簡単に紹介したい。ベルマンは職業翻訳家として仕事をしつつ、その自らの翻訳経験を基礎にして、翻訳研究に従事し、「翻訳学 traductologie」を提唱してきた。翻訳家としてのベルマンの仕事は多岐にわたる。1967年のF・シュレーゲルやノヴァーリスなどドイツ・ロマン主義の作品の翻訳をはじめとして、英語、スペイン語にも及び、ジャンルも小説、児童文学からエンターテインメント、実用書に至るまで、多彩である。とりわけ1970年代から80年代にかけての南米スペイン語圏の小説の翻訳は、ベルマン自身その翻訳理論を構想する上で大きな意味を持っていたと回想している。それは作品の「声性 *oralité*」の問題である。ベルマンは原作の「声性 *oralité*」や「言葉の姿 *lettre*」をどのように翻訳するかを重視する。その意味でベルマンはベンヤミンのテキストに注目する。とりわけ「翻訳者の使命」(以下「使命」と表記)などに萌芽的に現われていたベンヤミン独特の翻訳観を批判的に継承して、新たな翻訳理論「翻訳学」を構築しようとするのである。ベンヤミンの同じテキストを読んでも、J・デリダのように「原作テキストの持つ不安定性」やP・ド・マンのように「翻訳の究極的不可能性」といった独創的な(ある意味では恣意的な)解釈を展開するのとは対照的である。

ベルマンは1984年からパリ国際哲学コレージュやジャック・アミヨ・センターなどの翻訳研究組織で運営に携わりつつ、セミナーを行なってきた。けれどもアカデミズムに確固たる地歩を占めたわけではなかった。その一方でベルマンの翻訳論は文学、哲学に偏りすぎているとか、知性的抽象的すぎるといった浅薄な批判もなされた。だがベルマンは、あらゆる領域に普遍的に適応できるような、全体的統一的翻訳理論の構築などを目指しているわけではない。そもそもそのようなものが可能であると考えてもいない。

##### 1.2 「翻訳学」とは何か

現実の多くの翻訳を支配しているのは、従って我々の「常識」となっているのは「意味の伝達、再現」を目的とする翻訳である。この「意味の無色透明な移動、そこにおける主体の無化」

---

本稿は2011年6月12日に立教大学で行われた「翻訳研究育成プロジェクト」第一回会合での発表をもとにして新たに書き下ろしたものである。

をベルマンは翻訳の「プラトン主義」と呼ぶ。そこでは「意味」のために「言葉の姿 *lettre*」が犠牲にされ、その破壊が理論的にも正当化される。その結果ベルマンが「自文化中心主義(エスノセントリズム)」、「ハイパー・テキスト主義」と呼ぶものが姿を現わす。翻訳における「自文化中心主義」とは「全てを固有の文化に、固有の価値・規範に結びつけ、その外部に位置するもの(他者)を否定的に捉える」姿勢である。例えば「domestication 母語化」がそうである。「ハイパー・テキスト主義」とは「既に存在する他のテキストに基づいて、模倣、パロディ、パステイッシュ、翻案、剽窃など、全く別種の形式的変形を生み出す」ものである。例えば「超訳」を考えてみればよい。こうした「自文化中心主義」的、「ハイパー・テキスト主義」的翻訳観を、またそうした翻訳観を生み出すメカニズムを(ハイデガー的な意味で)「解体 *Abbau*」すること、すなわち「脱構築」すること。これが「翻訳学」の狙いである。

ベルマンは、翻訳の目指す「忠実性」がテキストの「精神」に対する忠実性ではなく、「言葉の姿」に対する忠実さでなくてはならないと述べる。けれどもテキストの「言葉の姿」の翻訳とはいわゆる逐語訳をすることではない。「言葉の姿」とはたんなる文字ではなく、原作の合理化、均質化、あるいは美化、誇張など翻訳過程で生じる「歪曲のシステムが作用する全ての次元」のことである。テキストの文字だけではなく、そのリズムや長さ、音韻なども含めたテキストの形姿全体を意味している。従ってベルマンによれば「あるべき翻訳」とは母語の内に「*littéralité* 言葉の姿へのこだわり」を受け容れることである。異質な言葉(他者)を自己の言葉の内に取り込むと、この二つの言葉の特質が翻訳の内に差異となって現われざるを得ない。その「差異」を際立たせ、原作の「声 *oralité*」として響かせること、あるいはむしろ「新しい声」を創り出してゆくこと。それが理想的翻訳、「詩」に近づく翻訳である。

### 1.3 「解釈学」としての「翻訳学」

翻訳をめぐる「理論」と「実践」との対立という考え方に対して、ベルマンは「経験」と「省察」が翻訳をめぐるキーワードであるとする。翻訳は「経験」が「省察」の内に開かれ、把握されることである。我々を我々自身から抜け出させるような「経験」、我々を変える他者との出会い、我々自身を知ること教える「経験」、そうした人間の根本的経験の「省察」を通して、自己を解釈し明確化してゆくことが翻訳である。

「省察」は主観的印象批評でもなければ、全てを説明しようとする、全体化を志向する一元論でもない。「省察」は翻訳の解釈学である。「解釈し、理解するとは、テキストを前にして自らを理解することである。主体が鍵をにぎる構築ではなく、自己がテキストにより構築される」。ベルマンによれば、翻訳はテキスト的経験であり、それはポール・リクールが「自己の解釈」「自己の理解」と呼ぶものと同じく、固有の知を孕んでいる。自己の理解はテキストの媒介なしには不可能なのである。

### 1.4 「批評」と「翻訳」

「批評」は作品と存在論的に結びついている。批評は作品の無限の意味を明らかにすることで、作品をより十全なものにする。それと同時に読者の「読み」を豊かにするものである。「翻訳」も「批評」と同じ構造を有している。あるべき翻訳は原作を「変身 *métamorphose*,

Verwandlung)させ、別の新しい作品に、「詩的なもの」にする(この「詩」とは狭義の詩だけではなく、芸術、人間の制作したものを意味する)。言い換えるならば、翻訳することにより、原作の言語に潜在している何かが姿を現わす。翻訳は作品の内に隠れているその何かを明るみに出すのである。

ベルマンは、ドイツ・ロマン主義以降の「批評」が 19 世紀に獲得した象徴的地位、市民権を、来たるべき「翻訳学」も手にしなければならないという決意を披歴する。

## 2. 本書の性格

### 2.1 「国際哲学コレージュ」でのセミナーの刊行

1984 年から 1989 年にかけての五年余り、ベルマンはパリの「国際哲学コレージュ」で「翻訳学」のセミナーを担当した。「国際哲学コレージュ」のユニークな活動内容については、西山雄二が 2009 年に制作し上映運動を続けてきた映画『哲学への権利』(2011 年勁草書房で単行本化)において詳しく紹介されている。注目すべき点は、「コレージュ」において「翻訳カリキュラム」が重視されたこと、「翻訳」が他の諸学の枢軸をなすと認識されたことである。「いかなる場合においても、省察の作業はつねにあるテキストの翻訳の問題に直面する」。それ以上に「注目すべきさまざまな知的活動は(哲学、精神分析、法学、科学、文学批評など)……全てみな翻訳という問題に当面する」。「翻訳学は異なる学問領域の狭間に生成する動的な学」である(西山『哲学への権利』)。「コレージュ」の目指す異なる学問領域の領域交差の促進によって、ベルマンの翻訳学のセミナーがその典型として位置づけられたのである。

本書『翻訳の時代』は 1984 年冬から一年余りにわたり、行なわれたセミナーの講義ノートが基になっている。このセミナーでは「哲学と翻訳」のテーマの下にベンヤミンの「翻訳者の使命」の註解がきわめて詳細になされた。なお 1984 年の「翻訳における逐語性の概念」をテーマとした講義は『La traduction et la lettre ou l'auberge du lointain(翻訳と言葉の姿あるいは遠来のものための宿)』としてまとめられている(1985 年 Trans-Europ-Repress 刊、1999 年 Seuil で再刊)。また 1989 年の「ジョン・ダンの翻訳の註解」をテーマとした講義は『Pour une critique des traductions: John Donne(翻訳批評のために:ジョン・ダン)』として結実している(1995 年 Gallimard 刊)。この二冊の著作、とりわけ後者を読むことで本書『翻訳の時代』の理解はよりいっそう豊かになると編者 I・ベルマンは述べている。

## 3. 本書の内容:序論

### 3.1 「註解」という形式の意義

註解とは本来「言葉の姿」の註解であり、たんなる意味の分析なのではない。註解は原作の(その「言葉の姿」の)註解であり、原作に働きかけるものである。だが同時に、その原作の「言葉の姿」の変化の仕方、すなわち翻訳の分析ともなり、翻訳に働きかけるものでもある。

歴史的に翻訳と註解との間には本質的結びつきが存在する。この根源的結びつきを、ベンヤミンは『一方通行路』の中で次のように述べる。

テキストに対する註解と翻訳の関係は、自然に対する様式と模倣の関係と同じである。同じ現象が異なった仕方でも考察されているのだ。註解も翻訳も聖なるテキストの木にあれば、永遠にざわめく木の葉でしかなく、世俗のテキストの木にあれば、時が来ると熟して落ちる果実である。

この根源的結びつきが今では見失われているからこそ、この翻訳と註解との結びつきを再び創り出すことが必要であるとベルマンは考えている。

### 3.2 言葉の形而上学

ベンヤミンは「翻訳者の使命」(1921)が自らのより大きな「言葉の形而上学」の一部をなすと考えている。この「言葉の形而上学」では「翻訳」の概念が「コミュニケーション」の概念に取って代わり、中心的位置を占める。ベンヤミンはこの「言葉の形而上学」を体系的に展開することではなく、それはさまざまな著作の内に潜在する形で、断片的な形で存在している。では「言葉の形而上学」とはどのようなものか。それを理解する上でベンヤミンの他の論文「言語一般および人間の言語について」(1916)、「模倣の能力について」(1933)の読解が不可欠であるとベルマンは述べる。

「言語一般および人間の言語について」(以下「言語一般」と表記)の中でベンヤミンは次のように述べる。語(名称)と事物とが一致していた始原の言語状態(「神の語」)から切断され破壊されたが故に、人間の言語は不完全で断片的なものである。この語(名称)と事物との一致を復元する上で、翻訳は重要な役割を果たすと。唯一の「純粹言語」のみが存在し、事物の存在と名称とが正しく一致している状態が、つまり「原罪」以前の、バベルの塔の物語以前の「樂園状態」という虚構がまず想定される。そしてこれに対比する形で、バベルの塔の物語以後の、複数の言語の存在により事物の正しい名称が失われているという「人間の言語」についての現実認識が生じる。そこでたんなるコミュニケーションの道具、伝達の媒介でしかない言語、記号と化した言語は「ブルジョワ的」と批判される。

「翻訳」はある言語を他の別の言語に移し変えるものとして理解されてはいない。翻訳は「神の語」「人間の言語」「事物の言語」のヒエラルキーの間で生じるものであり、それは例えば、宇宙の全ての存在が最も下位の無生命の事物から、人間を経て、「神」に至るまで連続しているという「存在の大いなる連鎖」のような、神学的世界観を背景としている。そうした世界観において「翻訳」とは「ある言語をさまざまな変態の連続を通じて、他の言語へと移行させること」(細見和之訳)である。「抽象的な同一性の領域や類似性の領域ではなく、変態のさまざまな連続をこそ翻訳は踏破する」(細見訳)。ベンヤミンによれば、語や言い回しの同一性、類似性を再現するのではなく、言語という媒質そのものが変身、変態をとげるのである。ここで「翻訳」はきわめて広義に捉えられている。「言語一般」ではたしかに宗教的神秘的色彩の濃い言語観が示されている。

だが同時に、ベンヤミンの「言葉の形而上学」を考えるにあたって、マラルメなど 19 世紀フランスの象徴主義、その詩的言語の理論の影響も見逃せないとベルマンは言う。ベンヤミンは

「事物の言語が認識にして名前である言語そのものの中へ入りこむことができるのは、ただ翻訳という姿においてだけである」(細見訳)と述べるが、この「言語そのもの」はマラルメの言う「最高の言語」を示唆する。すなわち、あらゆる外的意味や人間的表現から離脱した、始原の純粋な空虚へ回帰せんとする浄化的な言葉である。空虚への回帰、この「虚無」が至高の美をなす、詩的言語である。

ベルマンはさらに、ベンヤミンが書簡で披歴した信条に言及する。ホーフマンスタール宛ての手紙(1924)の中でベンヤミンは「あらゆる真理は言葉の内にその住まいを、父祖伝来の宮殿を持っている」と述べる。ベンヤミン自身は一度も主題化したことはないが、ここにルターからグリム、ハイデガーへと至るドイツの言語哲学思想の系譜を見出すことは容易である。言葉が「住まい」であるならば、それは何かのための道具、手段ではない。従って、この言語哲学思想は、言葉をコミュニケーションの手段、記号の体系とみなす言語観への批判となる。言語が「住まい」であるとは、ベンヤミンによれば言葉が「媒質」であるということだ。

「媒質」とは何か。「媒質」とは無色透明の媒介物ではなく、それ自体固有の性質を持つものである。例えば「水」という媒質を考えてみたい。水を沸かして湯にすると、水が熱という別の実体を伝えるのではなく、水自体が温まることで周囲の水に熱を伝えてゆく。熱源の近くの水がまず熱くなり、対流によりしだいに水全体が温められる。「水」という「媒質」それ自体が「湯」に変態してゆくのである。水が自ら湯になることでしか熱を周囲に伝えることができないように、言葉はそれ自身が変態する中でしか「熱(その言葉の本質)」を伝えることができない。湯を熱と水に分けることはできず、存在するのはあくまで異なった温度の水(言葉)だけである。「翻訳」とは異なった温もりの間の移行であるとベルマンは述べる。

こうしたドイツの言語哲学思想の伝統はドイツ観念論哲学と結びつく。ベルマンはベンヤミンの「純粋言語」がカントを念頭に置いていると指摘をする。この「純粋言語」はカントの「純粋理性」と密接な関係があり、ベンヤミンの認識では、純粋理性は純粋言語に基づいて生み出される。言い換えると「純粋言語」は全ての経験的諸言語に先行し、それら経験的諸言語を諸言語たらしめるようなものであるとベンヤミンは考えている。経験的諸言語はこの「純粋言語」を含むと同時に覆い隠してもいる。それゆえに、この「純粋言語」の探究を経験的諸言語においてなすことが、哲学者の、そして翻訳者の使命であるとベンヤミンは考えている。

ベルマンは以上のように、ベンヤミンの「言葉の形而上学」を構成する重要な境位(élément)を指摘するが、ベンヤミンのエクリチュールの特徴である断片性のために、「形而上学」の体系的、総合的把握はきわめて困難である。

### 3.3 ベンヤミンの思考の特徴

ベルマンによれば、ベンヤミンのエクリチュールの特徴の一つはその断片性である。「トルソー」のイメージといってもよい。ベルマンはそれを「完成したスケッチ」になぞらえる。「一つのテキストから別のテキストへ前進するという意味での連続性は存在しない。一つのテキストは発展し、それ自体で完成し、そして停止する。別のテキストが類似の運動を行なうが、続きという形式ではなく、他の諸テキストと共にいわば『星座的布置 Constellation』をなし、その中に自らを記録してゆく」

ベンヤミンの著作は主題、ジャンルにおいて多様だが、同一の境位において活動しているとベルマンは述べる。ベンヤミンの思考は不均質であると同時に一体性をなしている。別の言い方をするなら、きわめて抽象的な思考が具体的な、素朴な知覚に根差しているのである。

ベンヤミンのエクリチュールにはまた、若さと成熟が共存している。20歳から40歳までの間に著作の大半が書かれているが、この若さと成熟の共存はそのエクリチュールの断片性ともつながりがあるのではないかとベルマンは言う。

ベンヤミンの思考は、概念と同じように不透明なイメージによっているのも特徴的である。ベンヤミンはイメージによって思考し、そのイメージがベンヤミンの抽象的思考を支えているとベルマンは言う。先の『一方通行路』の引用例に見られるように。

ベンヤミンのテキストは「晦渋」だが「啓示的」である。「晦渋さ」はベンヤミンの思考の幽閉性（その秘密性と神秘性）に由来するものであるとベルマンは指摘する。それはたんにベンヤミンが講義などの形で自分の思想を語ろうとしなかったというだけではない。ベンヤミンは常套句を嫌い、コミュニケーションとしての言語を拒絶する。言葉は「純粹言語」としてしか自己を実現できないと考えているのである。そして言葉は神秘という様態、魔術という様態で存在すると、すなわち理由や説明という媒介を持たずに直接的に働きかけるものであるとブーバーに宛ててベンヤミンは述べる。ベンヤミンは言葉の「アウラ」の重要性を確信しているのである。それゆえに「啓示的」である。こうしたベンヤミンの思考の特徴が、そのテキストの「引用」「要約」を不可能にする。「註解」のみがベンヤミンのテキストに接近する方法なのである。

### 3.4 翻訳者としてのベンヤミン

ベンヤミンは「翻訳家」ではない。ベンヤミンの翻訳についての思想は、ベルマンとは対照的に、その翻訳家としての経験に何ら立脚していない。ベンヤミンは観念的、形而上学的地平で考えて書くとき、翻訳についての根源的考察にアプローチしてゆく。けれども自分の翻訳の経験に基づいて書くとき、「プルーストの複雑な文体をドイツ語に移すことはできない」（1926年ホーフマンスタール宛ての書簡）という陳腐な見解を吐露するばかりである。

ベンヤミンは一方で次のように述べる。「理論的に二つの言語が、ある統一した領域へ移行することは不可能ではないだろう。いや、これこそが全ての偉大な翻訳を生み出すのだ」（1917年 G・ショーレム宛ての手紙）。ベンヤミンは翻訳が「変態」であることを認識している。だが他方で、ベンヤミンは意味の透明な移動、行為の主体・翻訳者の透明性といった、伝統的な翻訳観の枠組みに囚われたままであるとベルマンは言う。翻訳の経験と翻訳の思想との間の断絶は、ベンヤミンの言語哲学に由来する、その翻訳思想の決定的限界を示しているとベルマンは指摘する。ベンヤミンは翻訳する主体が翻訳の本質的契機であることを十分に理解していないのである。翻訳はある主体の営みであり、その働きであり、その作品である。翻訳者を消去することは翻訳そのものを消去することになる。翻訳が「変態」であるというのは、ベルマンの「翻訳の解釈学」の観点から言うならば、他者との出会いによる自己の発見を通じた「変態」ということである。すなわち、異質な言語を固有の言語の内に取り入れる中で、原作に潜在する何かを引き出すとともに、翻訳言語の固有性を浮き彫りにすることで、新しい言語が生まれてくるということである。この点をベンヤミンは十分に認識していない。

主体としての翻訳者が透明化される伝統的言説においては、翻訳論はたんなる方法論にかなりえない。目的、理由が背景に退くからだ。しかし翻訳がたんなる意味の移動、再現とは別のものであると想定されたならば、たんなる方法論でしかない翻訳論には翻訳を統御、決定する力が失われる。そこで翻訳の本質についての新たな理論的省察が要請される。ベンヤミンはこのことを感じ取っていたからこそ「翻訳者の使命」を書いたはずである。だが十分に展開することができなかったのは、ベンヤミンの思考の特性だけが理由ではないだろう。そこには翻訳の抱える根源的矛盾があるからだ。翻訳の言説は翻訳の経験と同質のものではない。この断絶が翻訳の本質に固有の矛盾である。

### 3.5 表題の意味

ベルマンはこのベンヤミンの序文の表題 *Die Aufgabe des Übersetzers* に、翻訳者の特殊な使命が、論争を挑むような調子で、想定されているとみる。特殊な使命とは何であろうか。原作の忠実な再現といった伝統的な翻訳者の責務ではむろんない。ベルマンはこの表題に、ベンヤミンが熟知するドイツ・ロマン主義の術語世界での用法を読みとる。*Aufgabe* は *Auflösung* と密接な関係がある。その中でとりわけ(ある問題の)論理的意味での「解明」、(ある物質の)化学的意味での「溶解」、音楽的意味での不協和音の「解決」の三つが重要であるとベルマンは指摘する。翻訳は(解明すべき)理論的問題に、(溶解すべき)敵対的物質に、さらには(解決すべき)不協和音に直面しているという認識である。すなわち *Aufgabe* とは、次の「断章」で端的に述べられているものである。

「詩は異質な存在 (*das Fremde*) を溶解して (*aufloest*)、自らの固有の本質の内に取りこむ」(ノヴァーリス『断章集』ノヴァーリス研究会訳)

「翻訳者の使命」とは、言葉の領域における根源的な「不協和音」の「解決」に関わる働き、「真理」とのつながりを持つ働きである。生み出されたテキストである翻訳が「解決」である。意味の伝達、再現などの目的に従属するものではなく、翻訳に内在する問題(非オリジナル性 vs 主体の働きの産物)の「解決」を志向するものなのである。

## 4. 本書の内容:本論、そのいくつかの論点

ベルマンは『翻訳の時代』において、ベンヤミンの「翻訳者の使命」をほぼパラグラフごとに読み解き、註解してゆく。内容は多岐にわたり、厩大であるので、ここでは議論の対象としてよく言及されるいくつかの話題に絞って考えてみたい。

### 4.1 「翻訳可能性」について

ベンヤミンは全ての作品に「翻訳可能性」が構造化されていると、全ての作品が翻訳を要請すると考えている。すなわち「原作」の固有の形式においては萌芽として現われている何か、しかし「原作」の形式だけでは表象しきれない何かがあり、その捉え難い何かを「翻訳」において

引き出す必要がある。「翻訳」を通して別の言語に移し、異なった形式を与えることによって「捉え難い何か」の別の側面を引き出すことができる。「原作」自体がそれを要請している。「翻訳可能性」とはこのようなことである。ここでベンヤミンは「翻訳」をドイツ・ロマン派の「批評」概念に類似したものとして捉えている。「捉え難いもの」に新たな「形式」を与え、新たな創造の可能性をもたらすものという意味での類似である。ベルマンは、作品が自らを超えて別の形式を手にする(メタモルフォーズする)ための原理が「翻訳可能性」であるととらえる。ベンヤミンの「言語一般」における「変態」概念に即した解釈であろう。

#### 4.2 Überleben(死後の生、生き延びる生)と Fortleben(持続する生、生き続ける生)について

Überleben とは「翻訳」が「原作の死後」、原作を「越えて生き延びる」ことである。「原作」の生を越えて「翻訳」が「生き延びる」とは、「原作の生」が終わったところで「翻訳の生」が新たに始まることである。他方、Fortlebenとは「原作」があるいは「原作の芸術的本質」が死後も「翻訳」の中で持続する、生き続けることである。「翻訳」が「原作」を越えて「生き延びる」からこそ、「原作」も死後「生き続ける」ことができるのである。

ベルマンは翻訳が作品を Fortleben から Überleben へ移行させると解釈しているようだが、これは Überleben を「純粹言語」と結びつけて考えているからであろう。接頭辞の über-にはたしかに「超越的」なものとのつながりを、「生を超えた真の何か」を感じ取ることができるかもしれない。だが、岩波文庫の野村修訳では Überleben も Fortleben もどちらも同じく「死後の生」と翻訳されている。読みやすさを第一に考えた domestication の典型であろうが、ベンヤミンが分けて叙述しているものを同一化するのは問題があると思われる。

#### 4.3 「成熟」について

「翻訳」が「原作」を越えて「生き延びる」からこそ「原作」も死後「生き続ける」ことができる。そのためにはまず「翻訳」が「生き延び」なければならない。作品は「成熟」するための時間を持たねばならない。ベルマンは翻訳が可能になる「ふさわしい時期」を待つ必要があると述べる。「翻訳」が「生き延びる」ことで、「死後の生」に移行することで「原作」も「生き続ける」ことができ、「Nachreife 追熟」することが可能となるのである。例えばバナナが木から切り取られて運ばれてくる(死後)うちに熟してくるように、その作品が発表された当時には気づかれていなかったような思想内容や意味連関が新たに見出され、注目されるようになるということがある。

#### 4.4 「純粹言語」について

「使命」の中でベンヤミンは、各言語の言わんとするもの、全ての言語の志向するものの総体が「純粹言語」であると述べる。それは各言語に内的な「親縁性」があるということ、各言語が「純粹言語」への回帰を志向するという点で共鳴し合うということである。だがどの言語も単独では「純粹言語」に到達できない。それぞれの言語の志向する方向の先に、収斂するのが「純粹言語」である。「純粹言語」とは言葉の本来の姿、言葉の形と意味とが合一したもの、真理の言葉である。このように要約される「純粹言語」の背景をベルマンは探ってゆく。

まずこうした「純粹言語」にユダヤ神秘主義の影響、神学的な側面を見出すのは容易である。



全ての被造物はそれぞれの仕方、創造者である「神」を、究極の存在を「表現」すべく存在しているという、ユダヤ＝キリスト教的神学の考え方をヒントにしてベンヤミンが着想したという見方である。ベルマンはこうした神学的側面を認めつつも、特定の宗教と結びつけるのではなく、広義の、人間を世界の全体性へ結びつける形而上学として理解すべきであると言う。ベルマンはベンヤミンに対する「生の哲学」の影響に注目するのである。「生の哲学」とは19世紀から20世紀前半にかけて「生」の連続性と発展を説く哲学の系譜で、自然科学的生命観とは違って、生の非合理的、創造的要素に注目し「生全体」の合目的的連関を、「生全体」の生成発展を捉えようとするものである。ベルマンの念頭にあるのはアンリ・ベルクソンの「創造的進化」や「生の飛躍(エラン・ヴィタール)」といった思想、またヴィルヘルム・ディルタイの「テキストの解釈学」などであろう。とりわけディルタイは人間の歴史的生の表現としてのテキストの解釈を通じて、歴史的な「生の連関」を明らかにしようとする点で、「翻訳の解釈学」を目指すベルマンの関心を惹くのかもしれない。またドイツ・ロマン主義の「批評」概念、とりわけ「イロニー」の概念の影響は言うまでもない。「イロニー」とは、自己を表現しながらそれを自ら否定して反省的に自己の内面に立ち返る自己意識の運動である。それは結局、ある作品をより高次の視点から見ることによってその作品の隠れた意味を見出そうとする姿勢にもなる。ベンヤミンは「原作」と「翻訳」との関係性を「イロニー」により説明しようとしているという点が、ベルマンによれば重要である。

#### 4.5 「翻訳」という行為について

ここにベルマンによるベンヤミンの翻訳理論の批判的継承がみられる。ベンヤミンは、翻訳が原作の内容を相対化し、意味の重さから解放して「純粋言語」を表出させるものであると、他言語の内に「純粋言語」の萌芽を見出し、そこに呪縛されていた「純粋言語」を自らの言語の中で解き放つことであると述べる。別の言い方をするならば、翻訳により原作の言語が翻訳言語の内でもたまたまするような、そうした翻訳言語を志向することである。それは翻訳言語つまり自らの母語と改めて向き合い、新たな関係を結ぶことである。

ここでベンヤミンとベルマンの違いが現われる。ベンヤミンは「意味されるもの＝意味」と「意味される仕方＝言い方」とがア・プリオリに結合しているような純粋な言語を、事物と名称とが幸福な一致を見ていた、バベルの塔の物語以前の、アダムの言語を想定して、それを探求するものが「翻訳」であると考えている。しかしそれは意味の果てへの旅路であり、ヘルダーリンのソフォクレスの翻訳が陥った危険に、意味と無意味の境界という深淵に近づくことでもある。ベルマンに言わせれば、目的連関性に囚われているという点で、ベンヤミンはプラトン主義の地平を何ら越えていないのである。

ベルマンは「言語一般」での「変態」概念に立ち戻り、ベンヤミンを「創造的に誤読」してゆく。「翻訳」は原作に貫入すること、すなわち固有の言語に異質な言語を導き入れること(「他者という試練」)により、原作(異質な言語)の中の隠れた真理を表出させると同時に、翻訳言語自らの固有性を浮き彫りにし、それを通じて翻訳言語を変態させ、「第三の言語」を生み出すこと、すなわち自らの言語を作り変えること、新しく創り出すことであると。従って原作(作品)に「暴力をふるい」「歪める」ことは肯定される。翻訳は「原作のように」現われる必要はないのである。翻訳は原作のコピーではなく、「ミメシス(模倣)」であるからだ。すなわち「理想的他者のものま

ねでなく、自ら理想的他者としてふるまうことができるようにする『創造的ミメシス』である」(フリップ・ラクー＝ラバルト)からだ。

## 5. 最後に

### 5.1 ベンヤミンの思考の「発展」:「模倣の能力について」

ベルマンは「言語一般」と並んでこの「模倣の能力について」(1933年。以下「模倣」と表記)を「翻訳者の使命」の理解において重要な論文であると捉える。ベンヤミンのこの「模倣」は「言語一般」「使命」と微妙に異なる点がある。ベンヤミンは述べる。占星術師が天空の星から星座を読みとり、その星座から未来や運命を読み解いたように、そうした類似性の知覚、模倣の能力が文字や言葉の内に入り込んでいるから、そのような文字、言葉という媒質を読み解くことが必要である。言い換えれば、非感性的類似(感覚によっては知覚できない類似)を、その本質が瞬間的に姿を現わすのを捉えることが重要である。そしてそのことは言葉の記号性、意味伝達性に担われて初めて可能になると。「記号的なものと同様の模倣的なのが、言語領域のなかで溶け合う」(山口裕之訳)のだ。

「言語一般」「使命」「模倣」の中で、ベンヤミンの思考における「神秘主義的」側面一すなわち反近代主義の側面一は一貫してテキストの根底に存在している。だがはじめの二つの論文と違い、「模倣」においてはベンヤミンの「言葉の形而上学」は既存の近代的言語観を非難し、否定しようとするよりもむしろ、それを包括しようとする。そして「模倣(ミメシス)」のもつ創造の側面が改めて強調されるのである。「言語はひとつの媒質であり、模倣によって何かを生み出し理解するというあの昔の力は、この媒質のなかへとあますところなく入り込んでいったのである」(山口訳)

### 5.2 ベンヤミンの矛盾

ベンヤミンの「言葉の形而上学」は反近代主義を鮮明にするにも拘わらず、ベンヤミンの翻訳観は伝統的翻訳観を踏襲したままである。ベルマンは述べる、「ベンヤミンの『言葉の形而上学』も伝統的翻訳観も、その本質においてプラトン哲学の地平で思考している」。ここでプラトン主義とは、意味の透明な移動、主体の無化を意味するが、伝統的翻訳観が原作を中心とした意味の伝達、再現であるとすれば、ベンヤミンの「純粹言語」の解放を目指す翻訳観、その「言葉の形而上学」は、究極の目的を志向する、目的連関に囚われたものである。いずれにせよベルマンからみれば、真に存在するものと現象的なものとの、オリジナルとコピーとの、前者を基準とした二項対立の枠組みから抜け出していない。

プラトン哲学の地平一意味の移動、主体の無化の地平一では、翻訳は主体の働きと見做されない。だが実際には、翻訳はある主体の働き、作品である。主体はその否定性によってしか示されない。ここに緊張が生じる。プラトン主義の地平では、翻訳論は方法論的なものでしかない。意味の移動としての翻訳は、それと同質の言説、理論を生み出すだけである。だが現実の翻訳がそうではないように、翻訳がたんなる意味の移動ではなくなると、翻訳の経験と翻訳の言説との間に断絶が生じる。それゆえにたんなる方法論に代わる新しい翻訳論が必要にな

る。けれどもベンヤミンの「翻訳者の使命」はこの要請に応えているとはいえない。

### 5.3 ベンヤミンの「使命」を継承するベルマン

ベンヤミンは「言語一般」以来その言語論に、その「言葉の形而上学」にふさわしい翻訳論を提起していないとベルマンは述べる。萌芽として描出しているけれども、つきつめていないのである。翻訳は「純粹言語」を志向することではなく、ある言語を「変態」させること、「変態の連続を通して他の言語へ移行させること」であるとベルマンは読みかえる。プラトン主義的、伝統的翻訳観を問い直すためには、ベンヤミンのこの省察を発展させる以外にない。ベルマンの「翻訳学」が提唱される所以である。

### 5.4 ハイデガー『言葉への途上』との対比の必要性

ベルマンはなぜベンヤミンとハイデガーとの対比を提起しているのだろうか。1950年代に書かれた『言葉への途上』をはじめとしたハイデガーの言語哲学、とりわけ「言葉への道」論文に、政治的・思想的立場は極めて異なるものの、あたかもベンヤミンの著作から着想を得たかのような、類似性を見ることができるとベルマンは考える。

「言葉を言葉として経験すること。…多様な形態をとっている言(こと)の活動。…言葉の現前しているものは、示しとしての言(こと)である。…言葉は語る。…現前の全ての領域に達しつつ、それぞれの領域からそのつど現前するものを立ち現わせたり、姿を隠させたりしながら、言葉が語る。…全てがこの示す活動であるところの言(こと)の中にその根拠を持つ。言(こと)の解き放つ力のおかげで、現前するものに現前する形をとらせている。…語(ことば)を声に出すこと。…言(こと)というのは生起が口をきく流儀である。流儀とは歌とか旋律という意味で、歌いながら語るものである。…言(こと)は歌になる」(亀山健吉訳)

ハイデガーの「言(こと)」はベンヤミンの「純粹言語」とともに「ドイツ観念論の、そしてその隠れた源泉であるユダヤ神秘主義の遺産の影響を受けている」(ユルゲン・ハーバーマス)とベルマンは考えているのだろうか。ベンヤミンの「言語一般」「使命」「模倣」が、「言葉の姿」「文字」「媒質」という側面に焦点を当てているとすれば、ハイデガーの「道」では言(こと)の「声性」「歌性」が最終的に強調されている。ベンヤミンは「純粹言語」の本質をつきつめていないとベルマンが批判するとき、その本質をベルマンは、「純粹言語」が詩的言語、純粹な歌としての言語であることと考えているのだ。「聖書の行間逐語訳は、すべての翻訳の原像、もしくは理想なのである」(三ツ木道夫訳)とベンヤミンが「翻訳者の使命」を結ぶとき、聖なるテキストは、そして聖なるテキストの行間逐語訳もまた、「詩」になるのであり、そして「詩」には「声性」「歌性」が不可欠なのである。と同時に逐語訳は近代日本の翻訳の歴史に見られるように、新しい言葉を創り出すものでもあることを忘れてはならない。ベルマンが言うように、ベンヤミンの「翻訳者の使命」を批判的に継承すること、あるいはむしろ「創造的に誤読する」ことが必要なのである。

.....

【著者紹介】岸 正樹 (KISHI Masaki) 翻訳家、河合塾講師。英米仏の批評理論、翻訳理論を研究。主要な翻訳に、ジャン＝ジャック・ルセルクル『言葉の暴力―「よけいなもの」の言語学』(法政大学出版局)がある。

.....

【参考文献】

Berman, Antoine (2008). L'age de la traduction : <La tache du traducteur> de Walter Benjamin un commentaire, Saint-Denis : Presses Universitaires de Vincennes.

Berman, Antoine (1999). La traduction et la lettre ou l'auberge du lointain, Paris : Seuil.

Berman, Antoine (1995). Pour une critique des traductions: John Donne, Paris : Gallimard.

Broda, Martine (ed.) (1999). La traduction-poesie : a Antoine Berman, Strasbourg : Presses Universitaires de Strasbourg.

Kuhn, Irene (2007). Antoine Berman <productive> Uebersetzungskritik, Tübingen: Gunter Narr Verlag.

アントワーヌ・ベルマン(藤田省一訳)(2008)『他者という試練:ロマン主義ドイツの文化と翻訳』みすず書房

ヴァルター・ベンヤミン(野村修訳)(1994)『ベンヤミンの仕事 1 暴力批判論他十篇』岩波書店

ヴァルター・ベンヤミン(内村博信訳)(1996)『ベンヤミン・コレクション 2 エッセイの思想』筑摩書房

ヴァルター・ベンヤミン(三ツ木道夫訳)(2008)『思想としての翻訳』白水社

ヴァルター・ベンヤミン(山口裕之訳)(2011)『ベンヤミン・アンソロジー』河出書房新社

西山雄二 (2011)『哲学への権利』勁草書房

細見和之 (2009)『ベンヤミン「言語一般および人間の言語について」を読む』岩波書店

仲正昌樹 (2011)『ヴァルター・ベンヤミン』作品社

三島憲一 (2010)『ベンヤミン』講談社

オリヴィエ・モンジャン(久米博訳) (2000)『ポール・リクール哲学』新曜社

ハイデガー全集 12 (1996)『言葉への途上』(ヘルムート・グロス、亀山健吉訳)創文社

ヴァインフリート・メニングハウス(伊藤秀一訳)(1992)『無限の二重化』法政大学出版局

ボオドレール(鈴木信太郎訳)(1961)『悪の華』岩波書店